

# 東アジア文化の中から見た 鳥取における「湖山長者」の伝説について

— 中国資料を中心に —

豊田 久

Legend of “koyama Chôja” (湖山長者) in Tottori, in the culture of East Asia  
— About Chinese material —

TOYOTA Hisashi

キーワード：湖山長者 日（太陽）の神の崇拜 日の出 日読み 農事 喜見山 摩尼寺 鶏山  
扶桑樹 立岩

鳥取地域において、白兔神話と並んで有名な伝説に「湖山長者」の物語があります<sup>(1)</sup>。湖山長者についての確かな資料としては、江戸時代の小泉友賢が著した『因幡民談記』巻之第9・名所之部（1688年頃）があります<sup>(2)</sup>。そこには

長者屋敷並墓 高草郡伏野の濱にあり。是を赤坂の長者と云。此者國中第一の長者也と云傳ふ。上古の事にや時代尋ね考ふ可き様なし。只一の口碑今に傳ふる物語あり。小山の池昔は此長者の田地なりしが。或年田を植えんとて。多くの人を催し。一日の中に植えんとせしに。今少し残りければ。本意なく思ひ。金の團扇を以て。夕陽に向ひ。三度招きければ。山の端に掛りし日影。三段計も昇りて。終に彼の田をば植えしまいけり。斯様に天の日月をも招きかへす程の福分あれば何事も心に不叶と云う事なし。さて翌年も田を植えけるに。又去年の如く植え残しければ。長者又々金の團扇を以て。招きしほどに復日三段計り昇りて。その田を植え終りけり。されどもヶ様に我身の福分に慢じ。日月をも招き寄せしかば。其報にて家運忽に傾き田地俄に池となり。家名も傳はらず跡形もなく絶えけるとかや。安長の田土の中に。松生茂りたる小丘あり。是れ則ち其墓所なりと云。此長者細川の清泰寺をも興行し又摩尼寺をも建立せしと縁起にあり。又別に野坂の長者と云うものあり。名を千間之助と云へりしが。是は松上の神靈に罰せられ亡び失せける由云傳ふとあります。

この物語は、このほかに鳥取地域にはいろいろの言い伝えが今日まで残っていますが、『因幡民談記』に従うと、この地域の人々のいわば勢力家であつた湖山長者は、人々を動員した田植えが一日中に終わらなかったで、金の團扇（中国伝来の団扇も呪術的意味があります）を以て沈み行く太陽を招き返したというのです。この太陽（日）を招き返したという日本の種々の話について論じた、柳田国男氏の「日を招く話」（『妹の力』、1940年）の中で<sup>(3)</sup>、この湖山長者の例も挙げられており（日を返す話が、中国の漢代に作られた『淮南子』の記事と関係する話も引かれています）、そこではこれらの人物が太陽（日）につかえる宗教の代表的人物であると述べられており、また宮田登氏は「民間説話と現代—長者の死—」（大林太良編『民間説話の研究』、1987年）の中で<sup>(4)</sup>、これらの人物は日の出を拝み、日の神を司祭する者であり、また農業における、暦という、日読みの機能をも

つ者であったと述べられています。

そこで、早く農業が始まった東アジア世界の中で、古く、この農業の話と太陽（日）との関係、つまり農業と、太陽（日）を司り、日を祭ることとの意味をどのように考えていたのか、そしてそのことと、日読みの機能との関係を見てみたいと思います。

広く東アジア地域で最も古い太陽崇拝について書かれたまとまった資料としては、紀元前に書かれた春秋時代のこととして記す『国語』魯語下が有名です。そこに春秋時代の話として、公父文伯に母親が言った言葉として

この故に天子は大采（たいさい）して日に朝し、三公九卿と、地徳を祖識する、日中して政（まつりごと）を考え、百官の政事師尹、維（および）旅（もろもろ）の牧相と、民事を宣序するとあります。

この「大采（たいさい）して日に朝し」とは、日本の卑弥呼の時代に当たる三国時代の呉（222年～280年）の韋昭注には「天子は春分を以て日（太陽）を朝し、尊ぶべき所を示す」と解しています。「大采（たいさい）」については、同時代の虞翻の説の「大采（たいさい）は天子の祭服」を引用して、やはり紀元前の漢王朝の時代までに成立した『礼記』玉藻などの「日を朝す」の祭儀の礼をあげて、日の神を招き、憑依させる瑞玉を敷く五色の敷物と解しています。招いた日の神の神霊にとつて、依り代としての神位となるものです。日の神を賓客として招く時の、巫女や巫祝のあげる日の神をたたえる祝詞（のりと）は、漢王朝の時代頃に著された『尚書大伝』や『大戴礼記』に、それとするものが載せられています。大野俊氏はこの『国語』魯語下の訳において「天子は春分の朝、大采の礼を用いて、太陽を東門の外に礼拝する」と解釈されています<sup>(5)</sup>。春分説については、後に述べます。

つぎに、この日（太陽）を崇拝する意味としては、「日を朝し」に対応して魯語の下文に、「地徳を祖識す」とあります。この「地徳」とは先の韋昭注に、「生を広める所以なり」と解し、「祖識」とは「祖は習、識は知なり」と解しています。この「地徳」は大地の徳のことでありましょうが、この「地徳」について、やはり、古く、漢王朝時代に著された劉安の『淮南子』俶真訓に、「万民は……天和を被（こうむ）りて、地徳を食（は）む」とか、主術訓に、「（暴君であれば）百世は以て天和を被（こうむ）りて、地徳を履むことなし、食は民の本なり、民は国の本なり」とかありまして、この「地徳」について、後漢時代の高誘注に「地徳」とは、「五穀なり」とか、「生殖（生みふやす）するところ」と解しています。これらからすると、「地徳」とは、人々が生きるために食の本となる、大地が五穀を生産し育成することを言うのでありましょう。太陽に対する感謝もそこから来ます。

即ち、「地徳を祖識す」とは、太陽の光熱によるめぐみを受けて、大地が人々の食を生産するその大地の徳を学び知らしめることを言うのでありましょう。

つまり、典礼化されてゆく以前、東アジア地域で最も古い太陽崇拝のまとまりある資料からしますと、「日に朝し」から「地徳」までを通してみますと、もともと、太陽（日）を祭る最大の目標が、大地の生産という農業と深く結びついて語られていることがわかります。大野俊氏はここの部分の訳において、「ここで地徳と言ったのは、春分から農業をはじめ、万物の生育に専念するからである」とされています<sup>(6)</sup>。

この、太陽を祭祀する「朝日」の時期としましては、先の三国・呉の韋昭は春分とし、三礼の『礼記』玉藻、『周礼』春官・典瑞の同じ「朝日」などに対する、後漢時代の鄭玄の注も春分とするなど、

春分説が多いようです。それは、先に太陽が万物の生育と関係して解かれていたように、農業の開始時期との関係があったように思われます。これは、暦という、日読みの機能と関係してきますので、後述します。

これ以前、やはり紀元前の話ではありますが、殷王朝時代における祖先神や自然神の神々に対する祭祀の最大の目標が、祈年祭（稔りを祈る）にあったと言われており、また次の周王朝の時代に現れた、日・月・星・辰らを統括する天の神と、人々にとっての「豊年」（祈年）との強い結びつきも証明されています。それは、経済的豊かさを命じる「天命」の形を取っていました<sup>(7)</sup>。また太陽に対する祭祀として、司馬遷の著した『史記』封禪書や班固の著した『漢書』郊祀志下に、神仙思想や神話伝説の多い斉の国、即ち大海に面したこの山東省における秦の始皇帝や漢の武帝らが行った「成山日記」のことが出ており、古く成山で東の大海から昇る太陽を祭ったと述べています。成山は海に面して朝鮮半島や日本に近い場所であり、日の出を迎える山とされています。成山は、後に述べる太陽神話・扶桑樹のところにも出てきます。その始皇帝らの成山における、これらの太陽を祭った祭祀遺跡が近年出土しており<sup>(8)</sup>、それが事実であったことが証明されていまして、その祭祀形態が復元されています。

さらに遡れば、長江下流域の浙江省における紀元前五千年頃の河姆渡文化における、水田稲作遺構において見つかった、双鳥が太陽を運ぶ図像や、また双鳥が太陽（日）と月（水を司る）を運ぶ図像から、林已奈夫氏はそれらが水田稲作における生産力の根源である、太陽（日）と水の崇拝を示したものであろうと論じています<sup>(9)</sup>。太陽（日）と水との合体です。これらの文化は当然、南・北の地域で盛んに交流したでありましょうし、特に海に面した山東省は、同じ海に面した浙江省にあった、水田稲作の国である越が春秋時代の末に都を移した場所とも言われており（『呉越春秋』など）、その南の文化の北進も考えられるでしょう。

いずれにしても、湖山長者が太陽（日）につかえる宗教の代表的人物であり、日の出を拝み、日の神を司祭する人物であったとすると、それらはやはり農業と関係していたと思われませんが、事実、湖山長者の伝説は田植えの時の話となっているのですから、これらは整合性をもってきます。

つぎに、この鳥取の湖山長者の話が太陽と結びついていた話だとすると、太陽は東から昇るので、鳥取地域の平野部から見て東の方位、そこには鳥取地域を囲むように山々が連なっていますが、その東の山々のどこかに、この日の出を拝み、太陽（日）の司祭者という湖山長者と結びついた場所があるはずだと推測できます。それが、鳥取地域の平野部から見た東、さきの『因幡民談記』に湖山長者が建立したという摩尼寺のある、摩尼山・喜見山であります。

その喜見山に太陽と関係した話が残っています。さきの『因幡民談記』（巻之第9、名所之部）や、やはり『因幡民談記』に遅れて江戸時代に安部恭庵の著した『因幡志』（巻之第7、邑美郡）（1795年）、江戸時代の『因幡民談記』と同時期に成立した、土地の古老の話を集めて、覚深和尚が著した『因州 摩尼寺縁起』（1683年）（鳥取県立図書館蔵）らに記された<sup>(10)</sup>、「鶏山」の伝説です。

田中新二郎氏の『因幡の摩尼寺』（1958年）に<sup>(11)</sup>、氏が、喜見山へ登って来ると、「鶏山」（古墳と言われています。『因幡の摩尼寺』）の所まで至ると桜並木参道の間から、摩尼寺の麓が緑の間に浮かんで見えてくる、と述べておられるように、この喜見山へ登る山道の途中、その右側に「鶏山」があり、その場所にいたって、初めて前方に喜見山が見えてきます。この「鶏山」について、『因幡民談記』には、その山に「金鶏」があって、その鳴き声を聞く者は福力を得ると言い伝えられていると言ひ、これについて、小泉友賢は、東アジア世界で有名な太陽神話、太陽が掛かっている神樹・

扶桑樹の話に似せたものではないかという考えを付け加えています。もちろん、鶏は太陽を象徴していますが、神樹・扶桑樹の金鶏が鳴いて、太陽（日）を呼び出すという東アジアの神話の話です。これらの話は、湖山長者が建立したという摩尼寺のある喜見山やこの場所付近に古く太陽に関する何んらかの言い伝えが残っていた痕跡を示しているように思えます。喜見山から昇る太陽は、この場所付近からしか見えないようです。また、そのほぼ真東に当たる、喜見山の頂上近く、帝釈天がお立ちになったという、これも有名な喜見山の聖地・大巖岩の「立岩」（古く、仏教が入って習合する前は、もともと「立岩」は神の依り代という「磐座」であったようです）があります。この時、「立岩」にお立ちになった帝釈天は、みずから私はもともと「大日如来」だと述べています（『因州摩尼寺縁起』<sup>(12)</sup>）。この「大日如来」は「大日」と言いますように、人々はめぐみを与える太陽（日）と意識していました<sup>(13)</sup>。

さきの「成山日記」のところで述べたように、大海のそば、日の出を迎える山と言う成山の東、日の昇る東の海に、扶桑樹に掛かる太陽を生んだ義和の国があるという話が出てきます（『山海経』大荒東経、大荒東経、海外東経など）。日の出と、扶桑樹の関係を示しています。

つぎに、暦書のなかった頃、どのようにして農業の開始時期を知ったのでしょうか。湖山長者が太陽（日）につかえる宗教の代表的人物であり、日の出を拝み、日の神を司祭する者だとすると、そのこととどのように関係してくるのでしょうか。

三国時代を統一した、晋時代の陳寿が200年代後半に著した『三国志』魏書・東夷伝の倭人の条を見ますと、それに注をつけた南朝・宋の裴松之が引用した、三国・魏の魚豢が著した『魏略』によりますと、そこに

倭人は正月や四季を知らない、ただ春耕・秋収を記録して年数を数えるとあります。

これは200年代の日本のことを述べた大変有名な記事ではありますが、ここには当時の日本では暦書がなくて、ただ、春植えて、秋に収穫をするを以て、年数を知るのみだと述べています。

それではどのようにして、湖山長者らは農業の開始時期を知ったのでしょうか。そのことを考えるために、やはり早く農業が始まった大陸側の資料を見てみたいと思います。やはり、紀元前、漢王朝の時代までに著された『堯典』、又それを引用した、司馬遷の著した『史記』五帝本紀に、最も古くそのことについてまとめられた資料が出ています。暦書の研究にはよく引かれた資料です。その『堯典』には

（堯が）乃ち義和に命じて、欽（つつし）んで昊天（こうてん）に若（したが）い、日・月・星・辰を歴象して、敬（つつし）んで民に時を授（さづ）けしむ、……（義和に）命じて、嵎夷（ぐうい）に宅（お）らしめ、そこは暘谷（ようこく）と曰う、寅（つつし）んで出づる日を賓（みちび）き、東作を平秩（べんちつ）せしむ、日は中し、星は鳥、以て仲春を殷（ただ）す、厥（そ）の民は折（せつ）として、鳥獸は孳尾す

とあります。

即ち、昔、帝堯は義和に命じて、天の神にしたがい、「日・月・星・辰」という天体を観測させて、民（人々）に農耕の時期を教え授けさせたと述べています。もし、鳥取地域において、日をつかさどる湖山長者が日読みの機能をもつ者だとすると、これに当たることになります。日読みは、その地域の時間を支配することになります（暦書はそのため、後に日本を統一した支配者にとって重要な意味をもっていました）。日の支配はその意味で、更に進めれば、傲慢にも、日をも招くことが



出来るとか、動かすことが出来るという話になります。

『堯典』のここに主役として出てくる羲和なる人物は、さきにも出てきた、もともと東アジアの太陽神話で有名な、十個の太陽（十日）を生んだ女神の名です。いわゆる十日神話です。この十日には古くから名前がついており、それが甲、乙、丙、丁、……、の十干です<sup>(14)</sup>。古く、十日は殷王朝の時代から、まとめて「旬」と呼ばれ、龍形の動物が太陽（日）を運んでいる姿だとされています<sup>(15)</sup>。今の上旬、中旬の言葉もそこから来ています。よって殷王朝は十日神話を取っていたと考えられています。

漢王朝の時代には成立していた、中国における最初の地理書である『山海経』の大荒南経に、東海に羲和の国があり、彼女は帝峻の妻で十日を生み、我が子の日を水浴びさせていると述べています。東の大海から日が昇ってくるのを、母親が我が子に産湯を使っているように表現したものでしょう<sup>(16)</sup>。

また、大荒東経や海外東経にこの十日がその枝に掛かる、『因幡民談記』の「鶏山」のところに出来た神樹・扶桑樹の話が記されています。その樹木は、温源谷または湯谷（ようこく）、湯谷と呼ばれる聖なる水（無限の豊穰と再生をもたらす水）が根本にある谷にあって、一日ずつ太陽がその樹木から上に登って、出てゆくことが述べられています。そしてその太陽の中に、三本足の鳥がいると言います（「三」は万物を生むとして、豊穰を表しています）。

日本では、この鳥は同じ太陽（日）の神・天照大神（あまてらす）のお使いになっています。

これらの資料には、扶桑樹は「柱の如く三百里」とあって、天柱に見立てています。この「天柱」から日の神が昇るのです。『日本書紀』神代上に<sup>(17)</sup>、地上で生まれた日神・天照大神（あまてらす）を、「天柱（あめのみはしら）」でもって「天上に挙げた」とありますが、この天上と地上とを結ぶ「天柱」は日（太陽）の掛かっている扶桑樹の話との類似性が思われます。この「天柱」は天地を一つに結びつける宇宙樹です<sup>(18)</sup>。それは宇宙に秩序を与える神々の依り代でした。東アジアの文化で言う、宇宙山・崑崙山も天地を結ぶ「天柱」と言われているのと同じです。

さきの、湖山長者の物語に出てくる摩尼山・喜見山に登る途中の「鶏山」から見て、ほぼ真東の方位にある、喜見山の頂に近い聖地「立岩」は帝釈天が立ったと言う大巖石ですが、それがその帝釈天の住む印度の宇宙山・須弥山に当てて考えられているのも同じものです。喜見山の「立岩」を含め、これらはすべて天上と地上をつなぐ神々の依り代「天柱」です。

この太陽を生んだ女神である羲和は、この堯典では暦を作る官になっています。この堯典に言う日・月・星・辰を観測して、「敬（つつし）んで民に時を授（さづ）けしむ」とありました。この「時」について、白川静氏は『字統』（1984年）において<sup>(19)</sup>、この堯典の例をあげて、「時」とは農事暦を言うとして解釈しています。もと太陽を生んだ羲和が天体観測をするように命じられているのは、太陽（日）の観測が農事の作業工程に重要な意味をもっていたからでしょう。月は複雑な運動をするので、日の観測の方が容易だったと思われる。

この「敬（つつし）んで民に時を授（さづ）けしむ」とあるように、さきに言いましたように、暦は時間の支配を意味しており、この湖山長者が日読みの機能をもつ者であったとしますと、この地域の時間を支配していたことになるでしょう。それは、日本において、中央政府の権力がこの地域に及ぶ前のことです。このことは、太陽が昇る鳥取平野から見て東側の山々の内、とくに湖山長者と関係する喜見山と、「敬（つつし）んで民に時を授（さづ）ける」こととは、深い関係をもっていたらしいことを予測させます。

それは、今、中央政府の権力を行う鳥取の県庁が、鳥取城という、支配者が住んだ山の久松山の

麓にあるのとは対照的です。

堯典ではその後、羲和に命じて「暘谷（ようこく）」と呼ばれた「嵎夷（ぐうい）」において、太陽（日）が昇るのを観測させました。「嵎夷（ぐうい）」は、諸説ありますが、偽孔伝は太陽の昇る東表の地と解し、後漢の馬融は海嵎と解するなどがあります。「暘谷（ようこく）」は、さきの『山海経』海外東経らにあった、日の昇る扶桑樹のある温源谷、湯谷の谷の名と同じものでした。「寅（つつし）んで出づる日を賓（みちび）き」とは、司馬遷の『史記』五帝本紀にはこの堯典を引用して、「敬（つつし）んで日の出を導（みちび）き」とあり、司馬遷は敬んで導くことと解釈しています。神霊に対するこの「賓」の行為は、近年出土した殷王朝時代の甲骨文字から多く見えており<sup>(20)</sup>、おそらく日神に対する行為を示す言葉でしょう。ここでは、かなり典礼化しており、日の出の時刻を計って、農事の順序を立てることとされます。つまり、この表現には後にも述べますが、殷王朝時代からの古い表現も入っており、その古い伝承の強さを感じさせます。つぎの、「東作を平秩（べんちつ）せしむ」とは、「東作」は、春の農事が始まること、「平秩（べんちつ）」は、分かち秩序立てることと解されています。『史記』五帝本紀には、この部分が「東作を便程（べんてい）せしむ」とあって、唐の司馬貞の索隠には、作業工程を課することとしており、太陽の日の出を見て農作業の工程を順序立てて教えることにありましよう。

つぎの、「日は中し、星は鳥、以て仲春を殷（ただ）す」とは、「日は中し」は、偽孔伝、孔疏に、春分の日を言うとし、春分の昏に鳥星がことごとく見えると解しています。また、「殷」は正の意味で、春分仲春を正すことと解しています。ほかの人の解釈もほぼそのようです。

最後の「厥（そ）の民は折（せつ）として、鳥獸は孳尾す」は、偽孔伝、孔疏では、その「民」が春になって家の外に分散して、農耕に務めるようになることと解釈しています。しかし、この「折」は、既に殷王朝時代の甲骨文字などから研究されているように、「東方」や「春」を表す言葉でした。

即ち、出土した甲骨文字にある、東方、西方、南方、北方をそれぞれつかさどる神について述べたところに、「東方（の神）を析と曰（い）い、鳳（風）を協と曰（い）う、南方（の神）を乖と曰（い）い、鳳（風）を長と曰（い）う、西方（の神）を……」とあって、東方をつかさどる神の名は「析」とありました。この部分と同じ話が、さきの中国の最初の地理書である『山海経』大荒東経に「東方（の神）を折と曰い、来風を俊と曰い、東極に処りて、以て風を出入する」とあり、荒唐無稽の話とされていた『山海経』のこの記事と、後に出土した甲骨文字との類似に研究者は驚かされたものです<sup>(21)</sup>。事実そのように古く考えられていたと言うことです。甲骨文字における東方の神の名は「析」、一方『山海経』は「折」で似ています。その東方の神が使者として発する風神の名は（「鳳」の字は、もと「風」の字です）、甲骨文字は「協」、一方『山海経』は「俊」ですが、力を多く集めるのが「協」で、才が人を兼ねるのが「俊」で、意味から同じものです。この東方の神が「析」と呼ばれたのは、冬が終わり春になって、大地が雪におおわれ凍っていたのが解析し、「天地解けて、……百果草木、甲坼す」（『易』象伝）や、「東風は解凍す」（『呂氏春秋』孟春）などの意味からです。即ち、東方の神は、春の神です。「協風」は春風を意味しており、人々が協力してその農事に就くことを意味していると言われていています（『国語』周語）。本来、「力」はもと農具で、農業の開始時期にその農具を祭祀することだったのでしょう<sup>(22)</sup>。東方から春風が吹き、春の到来とともに、春耕の祭りが開始されるのです。つぎの、南方の風神の名が長大伸展を言う「長」のように、夏になって穀物が生長するのを意味するように、これらの神々の名が、農耕を主とする季節の特色から命名されていることは明らかだと思えます<sup>(23)</sup>。

堯典の「厥（そ）の民は折（せつ）として」は、春分の頃の日の出の観測から、季節が仲春になっ

て「民」が農事に就くのです。これらの堯典の部分を、池田末利氏は訳して<sup>(24)</sup>、「天体を観測して、これに基づいて注意深く民に農耕や収穫の時期を教え授けることにした。日夜の長さが等しく、これらによって春分の日を正して、民は農耕に務めるようになります」と解釈しています。中国からの留学生に聞いても、今でも春分は農耕の開始の目安だそうです。

そうすると、湖山長者が、従来から言われているように、太陽（日）につかえる宗教の代表的人物であり、日の出を拝み、日の神を司祭する者であったとするのと、東アジア世界で、太陽（日）信仰が大地の生産という農業と深く結びついて語られていたことと、この湖山長者の物語が初めて見たように、農事に関した時の話になっていましたので、両者は整合性をもっています。日の昇ってくる、鳥取の平野部から見て東側、湖山長者に深く関係している喜見山、また彼が建立したという摩尼寺、大日如来（万物を育成する太陽に比されています）や「鶏山」と太陽との関係などから、さきの田中新二郎氏が言われるように、この喜見山が古来因幡の国で、人々にとって唯一の豊作祈願のところであったろうとしておられるのは（『因幡の摩尼寺』）<sup>(25)</sup>、太陽と結んだこの長者との関係からしても納得できるのです。

そうすると、また鳥取の湖山長者は日につかえるほかに、日読みの機能をもつ者だと言われているのですから、それではどのようにして農業の開始時期を彼らは知ったのでしょうか。紀元前に成立した、大陸側の古い資料からしますと、それはやはり、太陽の神である羲和や、その羲和に太陽の昇る扶桑樹のある暘谷（ようこく）に居て日の出を観測させたように、やはり主に太陽の観測にあったようです。だから日読みとなります。つまり、方位的に、真東から太陽（日）が昇る日を計って、それは仲春の春分の頃ですが、それによって春における農業の開始時期を人々に教えたとありました。

そうしますと、鳥取の平野部から見て東にある喜見山と太陽の関係を考えますと、やはり太陽と関係する「鶏山」と、帝釈天、即ちもともと大日如来（太陽）がお立ちになった聖地とされる「立岩」が問題となります。実は、「立岩」は、「鶏山」から見てほぼ真東の線上に存在しています。

そこで、実際に平成20年3月20日の春分の日（実際は2日後）に、喜見山にある「鶏山」の場所に行き、そこから、太陽（日）がどのように昇ってくるのかを見ました。それが次頁の写真です。写真の右側が「鶏山」です。

確かに喜見山を登ってくると、さきに言いましたように、「鶏山」のところから初めて前方東の喜見山が見えてきます。その場所から見ると、真東に当たる、そのV字形の谷になったようなところから、まさに太陽が昇ってきました。それが丁度春分の頃に当たっています。それは「鶏山」の鶏が鳴くと、太陽が呼び出されるように、朝の日の光が「鶏山」を直刺します。その「鶏山」の場所から摩尼寺の麓も見えますのですが、今の摩尼寺は江戸時代に再建されたもので、土地の人の話では、もとはもっと奥にあったそうです。ただ、「鶏山」から日の出を見ると、東から昇ってくる太陽の輝きは、「鶏山」から見てほぼ真東にある、その太陽（日）の本にある「立岩」の上に立つ帝釈天の輝きを示しているようにも思えるのです。

これらのことは、太陽（日）につかえ、日の出を拝するとともに、日読みの機能をもつ湖山長者の伝説と、古く、何らかの関係があったのではないのでしょうか。

ここでは太陽（日）のみ取り上げましたが、湖山長者の伝説は、更に多くの話がつけ加わっています。日本海から現れた湖山長者（『因州 摩尼寺縁起』では産見（うぶみ）長者とします。稲魂

を産む人の意味かと思えます) の女の子であり、『因州 摩尼寺縁起』において、中国の「楊貴妃」



(1) 5時42分



(2) 6時11分



(3) 6時12分



(4) 6時45分



(5) 6時46分



(6) 6時47分

にたとえられた美少女の龍女・神龍（これらは水の神です）（今でも、江戸時代に作られた、「立岩」のそばにその八才の少女の石像があります）、仏教にいう龍女変成説、そして『因州 摩尼寺縁起』に述べられる大日如来（太陽、日）とこの龍女（水）の合体は、いわば聖地である日本海に面する「立岩」という須弥山の上で、「稲魂」が生まれる話のようです。これと同じく、湖山長者が日を招き返したのは、水田稲作にとっての太陽（日）と水の交合のためであったため、などの説もあります。

そして、「立岩」の近くにあるさきの龍女が現れた、豊穰をもたらす海や、山陰海岸（『因州 摩尼寺縁起』）とつながるといふ「穴谷」（今もその洞窟があります）や山陰における死者の霊が集まる喜見山、そしてそこに登場する天台宗の延暦寺第三座主・円仁慈覚大師など、更にこれらの話について、考えてみたいと思います。

山陰海岸ジオパークに文化的アプローチができればと思います。

(続)



## 注

- (1) 本稿については、鳥取大学の受業であった、私が指導して2年生の学生と一緒に調査した報告書、石倉朋恵「東アジア文化から見た現代に語られる湖山長者」、植木佳那、西村百代、船塚彩香「東アジア文化から見た現代に語られる湖山長者(2)」地域文化調査報告書(地域学部地域文化学科)、2008年、2007年、を合わせご覧下さい。
- (2) 小泉友賢『因幡民談記』1688年頃(因伯叢書版)。
- (3) 柳田国男「日を招く話」『妹の力』創元社、1940年、所収、157頁(『柳田国男集第九巻』筑摩書房、1969年)。
- (4) 富田登「民間説話と現代—長者の死」大林太良編『民話説話の研究』同朋社、1987年、所収、86~87頁。同氏「1、日読みの思想—神話と習俗」相良享、尾藤正英、秋山虔編『講座、日本思想4時間』東京大学出版会、1984年、所収、など参照。
- (5) 大野俊『国語上』魯語下の条、新釈漢文大系、66、明治書院、1975年。
- (6) 注(5)に同じ。
- (7) 赤塚忠「殷王朝における「雘」の祭祀」同氏『中国古代の宗教と文化—殷王朝の祭祀—』研文社、1990年、所収、158頁など(原論分は「殷王朝における雘の祭祀と中国における山岳信仰の特質(一)」日本甲骨学会『甲骨学』第六号、1958年)、豊田久「成周王朝の君主とその位相—豊かさと安寧—」水林彪、金子修一、渡辺節夫編『比較歴史学大系1、王権のコスモロジー』弘文堂、1998年、所収、同「成周王朝と「上下」考(上)—「上下の匍有」と「豊年」—」鳥取大学教育学部研究報告(人文・社会科学)第43巻第1号、1992年、など参照。
- (8) 王永波「成山玉器與日主祭—兼論太陽神崇拜的有關問題」文物1993年第1期、など参照。
- (9) 林已奈夫「所謂饗饗紋は何を表はしたのか—同時代資料による論證—」東方学報、第五十六冊、1984年、42~43頁、同氏「第4章、中国古代の遺物に表はされた「気」の圖像的表現」同氏『中国古玉の研究』吉川弘文館、1991年、所収、主に288、295、340頁、など参照。太陽神について、池沢優「中国の太陽(神)祭祀の諸類型—太陽の象徴と象徴としての太陽—」松村一夫、渡辺和子編『宗教学論叢7、太陽神の研究、上巻』リトン、2002年、所収、大林太良「第一章、太陽と火」『日本民族文化体系2、太陽と月—古代人の宇宙観と死生観—』小学館、1983年、所収、など参照。
- (10) 安陪恭庵『因幡志』1795年(因伯叢書版)、覚深『因州 摩尼寺縁起』(鳥取県立図書館蔵)1683年成。
- (11) 田中新二郎『因幡の摩尼寺』鳥取民族研究会、1958年。
- (12) 注(10)に同じ。
- (13) 平川南「第一章、「王」「大王」から「天皇」、「倭」から「日本」」同氏『日本の歴史二、日本の原像』小学館、2008年、など参照。
- (14) 松丸道雄「殷神の観念世界」『シンポジウム、中国古文字と殷周文化—甲骨文・金文をめぐる—』東方書店、1989年、所収、など参照。
- (15) 林已奈夫「帝舜考」日本甲骨学会『甲骨学』第十号、1963年、など参照。
- (16) 清、郝懿行撰『山海経箋疏』芸文印書館、袁珂校注『山海経校注』上海古籍出版社、1980年、前野直彬『全釈漢文大系33、山海経・列仙伝』集英社、1975年、など参照。
- (17) 坂本太郎、家永三郎、井上光貞、大野晋校注『日本書紀、上』第四段の条、岩波書店1967年、など。
- (18) 靳之林「第一章、人類の植物崇拜と中国の生命の樹」同氏『中国の生命の樹』言叢社、1998年、

曾布川寛『崑崙山への昇仙』中央公論社、1981年、など参照。

- (19) 白川静『字統』平凡社、1984年、「時」の条(新訂本、2004年)。
- (20) 豊田久「成周王朝と「賓」(2) -甲骨文に見える賓(宀)について-」鳥取大学教育学部研究報告(人文社会科学) 第44巻第1号、1993年、など参照。
- (21) 楊樹達「甲骨文中之四方風名與神名」同氏『積微居甲文説』1954年、52～57頁、赤塚忠「五、中国古代における風の信仰と五行説」同氏『赤塚忠著作集一、中国古代文化史』研文社、1988年、所収、402～403頁(原論文は、創立百周年記念『二松学舎大学論集』中国文学編、1977年、所収)、など参照。
- (22) 白川静『字統』平凡社、1984年、「力」の条(新訂本、2004年)。
- (23) 注(21)に同じ、赤塚氏は、397～408頁、など参照。
- (24) 池田末利『全釈漢文大系11 尚書』堯典の条、集英社、1976年。
- (25) 注(11)に同じ。

(2010年10月6日受付、2010年10月15日受理)